

松尾正人編『明治維新と文明開化』

神谷 大介

本巻の構成は以下の通りである。

- I 松尾正人「明治維新と文明開化」
- II 牧原憲夫「巡幸と祝祭日―明治初年の天皇と民衆―」
- III 山崎渾子「岩倉使節団と信仰の自由」
- IV 中野目徹「文明開化の時代」
- V 國 雄行「博覧会時代の開幕」
- VI 猪飼隆明「土族反乱と西郷伝説」

本巻を特徴付ける重要な視角は、タイトルからもわかるように、政治史中心の明治維新と文化史・思想史を主とする文明開化という研究傾向を関連付けて新たな時代像を提示するところにあると思われる。編者の松尾正人氏は「あとがき」で「明治維新と文明開化をあわせて考えることを目的とし、あえて書名にした」と述べている。そうした意味からすると、文明開化について直接論及している松尾氏の総論と中野目氏の論考(IV)はとりわけ重要な位置付けにあると言える。ここでは文明開化の問題に焦点を絞って若干の私見を述べていきたい。

まず、総論において松尾氏は「文明開化時代の幕開け」という節を設け、「文明開化の諸相」を紹介している。ここで松尾氏が文明開化の象徴として挙げている事象をみていくと、まず鉄道と海運の整備がある。具体的には、明治五年に新橋・横浜間に鉄道が開通し、「それまで一日がかりであった行程が、鉄道の五三分の乗車で到着することが可能となった」こと、明治二年に政府が半官半民の回漕会社を設立して横浜・神戸間を結ぶ定期航路を開設したり、同三年に岩崎弥太郎の九十九商会が高知藩所有の汽船を二隻借り受けて東

京・横浜・神戸・高知を結ぶ航路を開くなど、海運業が急速に変化したこと、旧幕府建設の横須賀製鉄所を接收しその継続に全力をあげたこと、三浦半島や伊豆半島に灯台が設置され海運の発展を支えたこと、というような事象である。また、「欧米資本主義の前進基地、西欧文明流入の最先端の地」であった開港場横浜における文化現象を紹介している。すなわち、領事館・商館・ホテルなどの洋風あるいは和洋折衷の建築、ガス灯の建設、西洋料理の流行などであるが、とりわけ「ジャパン・ヘラルド」や「海外新聞」、「横浜毎日新聞」などの発行を挙げて「横浜を中心とした最新の情報と啓蒙的な紙面が、文明開化を側面からささえるものとなった」としている。さらに、多摩地域を事例として開港場にもたらされた文明開化が各地に波及していった様相を記述している。ここでも神奈川県からの指示を受けて「横浜毎日新聞」の購入が図られたことに言及し、上からの開化政策の中で地域の「新聞購読者」が組織されたとしている。

一方、中野目氏の論考は、「明六雑誌」を刊行した明六社の思想活動に着目して新しい文明開化の時代像を構築しようとするものである。中野目氏によると、「…文明開化の研究対象は、社会史や国民国家論(批判)の手法や議論をふまえて、権力・秩序の構築と民衆の心性・記憶などをめぐり、天皇を戴く国民国家の形成過程における新しい民衆史、あるいは政治文化史として構想されているといえよう」と指摘し、「そうしたなかで文明開化の担い手への関心も、以前は為政者や明六社に結集した知識人に注目が集まったのに対して、最近では民衆や『ひとびと』へ移動してきたことは確かである」と近年の研究動向をまとめている。こうした中で中野目氏は明六社を取り上げることの意義を以下のように説明する。すなわち、「学説や教養など思想内容の頂点部分が、どのように前時代から継受され、あるいは海外から摂取されたのかを探るのではなく、むしろ同時代の社会のなかで思想が生み出されていく過程と、その過程における思想活動の存在形態を明らかにしていくというアプローチによって、すなわち文明開化という時代の社会思想史のなかでこそ明六

社は再評価されるべきなのである」と述べている。そして、西洋との接触をはかりながら日本を文明開化へ導くにあたって提示された新たな規範「事理」と、当初海外の様々な事情を指していたものが、文明開化期になるとしだいに内外の珍談奇談として語られるようになった情報「異聞」をキーワードとして前述の課題に迫っている。

以上のように、本巻では、松尾氏の総論で文明開化の諸事象を概括し、中野目氏のIV章で文明開化の社会思想史の面を掘り下げて具体的に論じるといふ構成になっている。しかし、その一方で、本巻の重要な分析視角である「文明開化」の概念規定が不明確なため、両者の統一性に欠けている観は否めないのではないだろうか。文明開化の諸相については、牧原氏の天皇巡幸や山崎氏の岩倉使節団、國氏の博覧会に関する諸論考を含め、様々な視点でまとめられているが、本巻のタイトル、行論の関係上、明確なかたちで「文明開化」の新たな分析手法を提示する必要があったと思われる。それが欠如しているが故に、総論と各論との間に若干の乖離があるように受け取れてしまうのである。

例えば、中目黒氏の論考はあくまで同時代の言論空間での位置付けであり、「明六雑誌」を受容した社会層の実態的分析を踏まえたものではない。また、「新聞雑誌」(一八七四年一月二四日)の「府県雑誌」欄に掲載された「開化鳥」の分析などから「文明開化の時代には政策レベルから生活レベルに至る社会の全領域に対して開かれた議論と情報の交換の場が成立し、かつ、あらゆる権威を批判する精神が横溢していた」と述べているが、新聞の雑報欄の記事がどこまで当時の人々の生活・思想を反映したものといえるのかは疑問が残る。明六社による啓蒙活動の影響は看守できるものの、それを受け入れた社会的要因に関しても言及がほしいところである。

政府関係者による開化政策として推進されていった側面や言論空間における位置付けだけではなく、開化を受容した社会基盤についても何らかの検討が必要だったのではないだろうか。「明六社の思想は一部知識人の占有物ではなく、いわば社会現象の一つとして時

代に共有される存在であったと思われるのである」とするならば、なぜ共有されたのか、幕末期以降の社会各層を縦断する情報環境の整備が「処士横議」・「公儀輿論」となり、「そこに福沢諭吉の著作や『明六雑誌』が投げ込まれたゆえに、たちまち無数の共鳴連鎖を生んだのであった」とするならば、なぜ共鳴連鎖を生んだのかが問われなければならないだろう。そうでなければ、社会の中で思想が生成されていく過程や思想活動の存在形態を十分に理解することはできないと思われるからである。つまり、人々の生活実態としての「文明開化」、政府の政策としての「文明開化」、言説としての「文明開化」をどのように統一的に理解すればよいのか、ということである。文明開化に関する先行研究の進展、明治維新の政治過程との関わりを明らかにするという本巻の目的を考慮すれば、何らかの体系的な説明がほしかったところである。

とはいえ、個々の論考はそれぞれの視点で明治維新と文明開化の諸相を精緻に考察した優れた研究成果を提示しており、まさに「時代史」を論述している。

もとより、評者は文明開化研究に関しては門外漢であり、浅学ゆえの的はずれな指摘もあらうかと思われるが、この点については執筆者諸氏のご海容を乞う次第である。

また、末筆ではあるが、本巻から多くの教示を得たことを述べておきたい。